

城崎を憶ふ

泉鏡花

青空文庫

雨が、さつと降出した、停車場へ着いた時で——天象は卯の花くだしである。敢て字
 義に拘泥する次第ではないが、雨は其の花を亂したやうに、夕暮に白かつた。やゝ大
 粒に見えるのを、もし掌にうけたら、冷く、そして、ぼつと暖に消えたであらう。空は
 暗く、風も冷たかつたが、温泉の町の但馬の五月は、爽であつた。
 俣は幌を深くしたが、雨を灌いで、鬱陶しくはない。兩側が高い屋並に成つたと
 思ふと、立迎ふる山の影が濃い緑を籠めて、輻とともに動いて行く。まだ暮果てず明い
 のに、濡れつゝ、ちらちらと灯れた電燈は、燕を魚のやうに流して、静な谿川に添つ
 た。流は細い。横に二つ三つ、續いて木造の橋が濡色に光つた、此が旅行案内で
 知つた圓山川に灌ぐのである。
 此の景色の中を、しばらくして、門の柳を潜り、帳場の入らつしやい——を横に聞き
 て、深い中庭の青葉を潜つて、別にはなれに構へた奥玄關に俣が着いた。旅館
 の名の合羽屋もおもしろい。
 へい、ようこそお越しで。挨拶とともに番頭がズイと掌で押出して、扱て黙つて顔
 色を窺つた、盆の上には、湯札と、手拭が乗つて、上に請求書、むかし「かの」と

云つたと聞くが如き形式のものが醜然とある。おやく／＼前勘か。否、然うでない。：特、一、二、三等の相場づけである。温泉の雨を掌に握つて、我がものにした豪儀な客も、ギョツとして、此れは悄氣る……筈の處を……又然うでない。實は一昨年の出雲路の旅には、仔細あつて大阪朝日新聞學藝部の春山氏が大屋臺で後見について居た。此方も黙つて、特等、とあるのをポンと指のさきで押すと、番頭が四五尺する／＼と下つた。(百兩をほどけば人をしさらせる) 古川柳に對して些と恥かしいが(特等といへば番頭座をしさり。)は如何? 串戲ぢやあない。が、事實である。

棟近き山の端かけて、一陣風が渡つて、まだ幽に影の残つた裏櫛子の竹がさら／＼と立騒ぎ、前庭の大樹の濃い緑を壓へて雲が黒い。「風が出ました、もう霽りませう。」「これはありがたい、お禮を言ふよ。」「ほほほ。」「ふつくり色白で、帯をきちんとした島田鬻の女中は、白地の浴衣の世話をしながら笑つたが、何を祕さう、唯今の雲行に、雷鳴をともしなひはしなからうかと、氣遣つた處だから、土地ツ子の天氣豫報の、風、晴、に感謝の意を表したのであつた。

すぐ女中の案内で、大きく宿の名を記した番傘を、前後に揃へて庭下駄で外湯に

行く。此の景勝、愉樂の郷にして、内湯のないのを遺憾とす、と云ふ、贅澤なものもあるけれども、何、青天井、いや、滴る青葉の雫の中なる廊下續きだと思へば、渡つて通る橋にも、川にも、細々々々、とからくりがなく洒張りして一層好い。本雨だ。第一、馴れた家の中を行くやうな、傘さした女中の斜な袖も、振事のやうで姿がいゝ。

——湯はきびくと熱かつた。立つと首ツたけある。誰の？……知れた事拙者のである。處で、此のくらゐ熱い奴を、と顔をざぶくと冷水で洗ひながら腹の中で加減して、やがて、湯を出る、ともう雨は霽つた。持おもりのする番傘に、片手腕まくりがしたいほど、身のほてりに夜風の冷い快さは、横町の錢湯から我家へ歸る趣がある。但往交ふ人々、は、皆名所繪の風情があつて、中には時に立迷ふ旅商人の状も見えた。

並んだ膳は、土地の由緒と、奥行をも語る。手を突張ると外れさうな棚から飛出した道具でない。藏から顯はれた器らしい。御馳走は——

鯛の味噌汁。人参、じゃが、青豆、鳥の椀。鯛の差味。胡瓜と鳥賊の酢のもの。鳥の蒸焼。松茸と鯛の土瓶蒸。香のもの。青菜の鹽漬。菓子、苳。

所謂、貧僧のかさね齋で、ついでに翌朝の分を記して置く。

蛭、白味噌汁。大蛤、味醂蒸。並に茶碗蒸。蕨、椎茸つけあはせ、蒲
 鉾、鉢。淺草海苔。

おほまはぐりと
 大な蛤、十ウばかり。(註、ほんたうは三個)として、蛭も見事だ、碗も皿もうまいノ
 、と慌てて瀬戸ものを噛つたやうに、覺えがきに記してある。覺え方はいけ粗雑だが、
 料理はいづれも念入りで、分量も鷹揚で、聊もあたじけなくない處が嬉しい。
 三味線太鼓は、よその二階三階の遠音に聞いて、私は、ひっそりと按摩と話した。此
 の按摩どのは、團栗の如く尖つた頭で、黒目金を掛けて、白の筒袖の上被で、
 革靴を提げて、そくに立つて、「お療治。」と顯はれた。——勝手が違つて、私は一
 寸不平だつた。が、按摩は宜しう、と縁側を這つたのでない。此方から呼んだので、
 術者は來診の氣組だから苦情は言へぬが驚いた。忽ち、縣下豊岡川の治水工事、
 第一期六百萬圓也、と胸を反らしたから、一すくみに成つて、内々期待した狐
 狸どころの沙汰でない。あの、潟とも湖とも見えた……寧ろ寂然として沈んだ色は、
 おほいふるぬま
 大なる古沼か、千年百年ものいはぬ靜かな淵かと思はれた圓山川の川裾には——
 河童か、獺は?……などと聞かうものなら、はてね、然やうなものが鯨の餌にありますか、
 と遣りかねない勢で。一つ驚かされたのは、思ひのほか、魚が結構だ、と云つたのを嘲

笑つて、つい津居山の漁場には、鯛も鱸もびち／＼勿ねて居ると、掌を肩で勿ねた。よくせき土地が不漁と成れば、佐渡から新潟へ……と聞いた時は、枕返し、と云ふ妖怪に逢つたも同然、敷込んだ布團を取つて、北から南へ引くりかへされたやうに吃つくり驚した。旅で劍術は出来なくても、學問があれば慙うは駭くまい。だから學校を怠けては不可い、従つて教はつた事を忘れては不可い、但馬の圓山川の灌ぐのも、越後の信濃川の灌ぐのも、船ではおなじ海である。

私は佐渡と云ふ所は、上野から碓氷を越えて、雪の柏原、關山、直江津まはりに新潟邊から、佐渡は四十五里波の上、と見るか、聞きかするものだ、と浮りして居た。

七日前に東京驛から箱根越の東海道。——分つたく——逗留した大阪を、今日午頃に立つて、あゝ、祖母さんの懷で昔話に聞いた、栗がもの言ふ、たんばの國。故と下りて見た篠山の驛のプラツトホームを歩行くのさへ、重疊と連る山を見れば、熊の背に立つ思がした。酒顛童子の大江山。百人一首のお嬢さんの、「いくのの道」もそれか、と辿つて、はる／＼と來た城崎で、佐渡の沖へ船が飛んで、キラリと飛魚が刎出したから、きたなくも怯かされたのである。——晩もお總菜に鮭を退治た、北海道の産である。茶うけに岡山のきび團子を食べた處で、咽喉に詰らせる

法はない。これしかしながら旅の心であらう。――

夜はやゝ更けた。はなれの十疊の奥座敷は、圓山川の洲の一處を借りたほど、森閑とも寂しい。あの大川は、いく野の銀山を源に、八千八谷を練りに練つて流れるので、水は類なく柔かに滑だ、と又按摩どのが今度は聲を沈めて話した。豊岡から來る間、夕雲の低迷して小浪に浮織の紋を敷いた、漫々たる練絹に、汽車の窓から手をのぼせば、蘆の葉越に、觸ると揺れさうな思で通つた。旅は楽しい、又寂しい、としをらしく成ると、何が、そんな事。……ちきその飛石を渡つた小流から、お前さん、苦船、屋根船に炬燵を入れて、美しいのと差向ひで、湯豆腐で飲みながら、唄で漕いで、あの川裾から、玄武洞、對居山まで、雪見と云ふ洒落さへあります、と言ふ項を立てた苦も舩も白銀に、珊瑚の袖の揺るゝ時、船はたゞ雪を被いだ翡翠となつて、白い湖の上を飛ぶであらう。氷柱の蘆も水晶に――

金子の力は素晴らしい。

私は獺のやうに、ごろんと寝た。

而して夢に小式部を見た。
嘘を吐け！

パイロロロパイ——これは夜が明けて、晴天に鶯の鳴いた聲ではない。翌朝、一風呂キヤくと浴び、手拭を絞つたまゝ、からりと晴れた天氣の好さに、川の岸を坦々とさかのぼつて、來日ヶ峰の方に旭に向つて、晴々しく漫歩き出した。九時頃だが、商店は町の左右に客を待つのに、人通りは見掛けない。静な細い町を、四五間ほど前へ立つて、小兒かと思ふ小さな按摩どのが一人、笛を吹きながら後形で行くのである。パイロロロロパイーとしよんぼりと行く。トトトン、トトトン、と間を緩く、其處等の藝妓屋で、朝稽古の太鼓の音、ともに何となく翠の滴る山に響く。

まだ羽織も着ない。手織縞の茶つぽい袷の袖に、鍵裂が出来てぶら下つたのを、腕に捲くやうにして笛を握つて、片手向うづきに杖を突張つた、小倉の櫂の口が、ぐたりと下つて、裾のよぢれ上つた瘦脚に、ぺたんことも曲んだとも、大きな下駄を引摺つて、前屈みに俯向いた、瓢箪を俯向に、突き出た出額の尻すぼけ、情を知らず故らに繪に描いたやうなのが、パイロロロパイと仰向いて吹いて、すぐ、ぐつたりと又俯向く。鍵なりに町を曲つて、水の音のやゝ聞こえる、流の早い橋を越すと、又道が折れた。突當り

がもうすぐ山懐に成る。其處の町屋を、馬の杵形に一廻りして、振り返つた顔を見ると、額に隠れて目の窪んだ、頤のこけたのが、かれこれ四十ぐらゐな年であつた。

うかくくと、あとを歩行いた方は勝手だが、彼は勝手を超越した朝飯前であらうも知れない。笛の音が胸に響く。

私は欄干にイんで、返りを行違はせて見送つた。おなじやうに、或は傾き、また俯向き、さて笛を仰いで吹いた、が、やがて、来た道を半ば、あとへ引返した處で、更めて乗つかる如く下駄を留めると、一方、鎮守の社の前で、ついた杖を、丁と小脇に引そばめて上げつゝ、高々と仰向いた、さみしい大な頭ばかり、屋根を覗く來日ヶ峰のひとところ一處を黒く抽いて、影法師を前に落して、高らかに笛を鳴らした。

——きよきよらつ、きよつゝ、きよつゝ！

八千八谷を流るゝ、圓山川とともに、八千八聲と稱ふる杜鵑は、ともに此地の名物である。それも昨夜の按摩が話した。其時、口で眞似たのが此である。例の

(ほぞんかけたか)を此の邊では、(きよきよらつ、きよつゝ)と聞くらしい。

ひと聲、血に泣く其の笛を吹き落すと、按摩は、とぼくと横路地へ入つて消えた。續いて其處を通つたが、もう見えない。

わたしは何故か、ぞつとした。

太鼓の音の、のびやかなあたりを、早足に急いで歸るのに、途中で橋を渡つて岸が違つて、石垣つゞきの高塀について、打つかりさうに大な黒い門を見た。立派な門に不思議はないが、くゞり戸も煽つたまゝ、扉が夥多しく裂けて居る。覗くと、山の根を境にした廣々とした庭らしいのが、一面の雜草で、遠くに小さく、壊れた四阿らししいものの屋根が見える。日に水の影もさゝぬのに、其の四阿をさがりに、二三輪、眞紫の菖蒲が大きく咲いて、縋つたやうに、倒れかゝつた竹の棹も、池に小船に棹したやうに面影に立つたのである。

此の時の旅に、色彩を刻んで忘れないのは、武庫川を過ぎた生瀬の停車場近く、向う上の徑に、じり〜と蕊に香を立てて咲揃つた眞晝の芍薬と、横雲を眞黒に、嶺が颯と暗かつた、夜久野の山の薄墨の窓近く、草に咲いた姫薊の紅と、——此の菖蒲の紫であつた。

ながめて居る目が、やがて心まで、うつろに成つて、あつと思ふ、つい目さきに、又うつくしいものを見た。丁ど瞳を離して、あとへ一歩振り向いた處が、川の瀬の曲角で、やゝ高い向岸の、崖の家の裏口から、巖を削れる状の石段五六段を下りた汀に、

洗濯せんたくものをして居ゐた娘むすめが、恰あたかもほつれ毛げを搔かくとて、すんなりと上あげた眞まつ白しろな腕うでの空そらざまなのが睫まつげ毛かすを掠かすめたのである。

ぐらり、がたがたん。

「あぶない。」

「いや、これは。」

すんでの處ところ——落おつこちるのでも、身み投なげでも、はつと抱だきとめる救すく手ひては、何なんでも不ふ意いで出はう方ほうが人にん氣きが立たつ。すなはち同どう行かうの雪せつ岱たいさんを、今いままで祕かくしておいた所ゆゑん以もてあ

る。
私わたしは踏ふんだ石いしの、崖がけを崩くづれかゝつたのを、且かつ視みて苦く笑せうした。餘あまりの不ぶ状じやうに、娘むすめの方ほうが、優やさし顔かほをほつと目ま瞼たぶに色いろを染そめ、膝ひざまで卷まいて友いう禪ぜんに、ふくら脛はぎの雪ゆきを合あはせて、紅もみ絹ぬいの影かげを流ながれち散ちらして立たつた。

さるにても、按あん摩まの笛ふえの杜ほと、鶉ぎすに、抜ぬかしもすべき腰こしを、娘むすめの色いろに落おちようとした。私わたしは羞はぢ且かつ自みづから憤きんつて酒さけを煽あふつた。——なほ志こころす出いづ雲もぢ路を、其その日ひは松まつ江えまで行ゆくつもり

の汽車きしやには、まだ時じ間かんがある。私わたしは、もう一いちど度やど宿をを出でた。
すぐ前まへなる橋はしの上うへに、頬ほ、かぶり被かぶりした山やま家がの年とし増まが、苞つとを開ひらいて、一ひとり人り行ゆく人ひとのあとを通とほ

つた、私を呼んで、手を舉げて、「大なる自然薯買うておくれなはらんかいなア。」……
 はおもしろい。朝まだきは、旅館の中庭の其處此處を、「大きな夏蜜柑買はんせ
 い。」……親仁の呼聲を寝ながら聞いた。働く人の賣聲を、打興ずるは失禮だ
 が、旅人の耳には唄である。

漲るばかり日の光を吸つて、然も軽い、川添の道を二町ばかりして、白い橋の見え
 たのが停車場から突通しの處であつた。橋の詰に、——丹後行、舞鶴行——住の
 江丸、濱鶴丸と大看板を上げたのは舟宿である。丹後行、舞鶴行——立つて見
 たばかりでも、退屈の餘りに新聞の裏を返して、バンクバー、シヤトル行を睨むが如
 き、情のない、他人らしいものではない。——蘆の上をちらりと舞ふ陽炎に、袖が鷗
 になりさうで、遙に色の名所が偲ばれる。手軽に川蒸汽でも出さうである。早や、そ
 の蘆の中に並んで、十四五艘の網船、田船が浮いて居た。
 どれかが、黄金の魔法によつて、雪の大川の翡翠に成るらしい。圓山川の面は今
 こゝに、其の、のんどりと和み軟いだ唇を寄せて、蘆摺れに汀が低い。イめば、暖く水に
 抱かれた心地がして、藻も、水草もとろくと夢が蕩けさうに裾に靡く。おゝ、澤山
 な金魚藻だ。同町内の瀧君に、ひと俵贈らうかな、……水上さんは大なる目をし

て、二七の縁日に金魚藻を探して行く。……

私は海の空を見た。輝く如きは日本海の波であらう。鞍掛山、太白山は、黛を左
右に描いて、來日ヶ峰は翠なす額髪を近々と、面ほてりのするまで、じりりと
情熱の呼吸を通はす。緩い流は浮草の帯を解いた。私の手を觸れなかつたのは、濡
れるのを厭つたのでない、波を恐れたのでない。圓山川の膚に觸れるのを憚つたのであ
つた。

城崎は——今も恁の如く目に泛ぶ。

こゝに希有な事があつた。宿にかへりがけに、客を乗せた俥を見ると、二臺三臺、俥
夫が揃つて手に手に鐵棒を一條づゝ提げて、片手で楫を壓すのであつた。——煙草
を買ひながら聞くと、土地に數の多い犬が、俥に吠附き戯れかゝるのを追拂ふためださ
うである。駄菓子屋の縁臺にも、船宿の軒下にも、蒲焼屋の土間にも成程居た
が。——言ふうちに、飛かゝつて、三疋四疋、就中先頭に立つたのには、停車
場近く成ると、五疋ばかり、前後から飛びかゝつた。叱、叱、叱、畜生、畜生
、畜生。俥夫が鐵棒を振舞すのを、橋に立つて見たのである。

其の犬どもの、耳には火を立て、牙には火を齒み、焰を吹き、黒煙を尾に倦いて、
 車とも言はず、人とも言はず、炎に擲んで、躍上り、飛薙り、狂立つて地獄の形
 やうさうあらは
 相を顯したであらう、と思はず身の毛を慄立てたのは、昨、十四年五月二十三
 日十一時十分、城崎豊岡大地震大火の號外を見ると同時であつた。
 地方は風物に變化が少い。わけて唯一年、もの凄いやうに思ふのは、月は同じ月、
 日はたゞ前後して、——谿川に倒れかゝつたのも殆ど同じ時刻である。娘も其處に按摩
 も彼處に——
 其の大地震を、あの時既に、不氣味に按摩は豫覺したるにあらざるか。然らば八千
 八聲を泣きつゝも、生命だけは助かつたらう。衣を洗ひし娘も、水に肌は焦すまい。
 當時寫眞を見た——湯の都は、たゞ泥と瓦の丘となつて、なきがらの如き山あるのみ。
 谿川の流は、大むかでの爛れたやうに……其の寫眞も赤く濁る……砂煙の曠野
 を這つて居た。

木も草も、あはれ、廢屋の跡の一輪の紫の菖蒲もあらば、それがどんなに、と思ふ。

——今は、柳も芽んだであらう——城崎よ。

大正十五年四月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※表題は底本では、「城崎《きのさき》を憶《おも》ふ」となっています。

※表題の下にあった年代の注を、最後に移しました。

入力：門田裕志

校正：米田進

2002年5月8日作成

2016年2月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

城崎を憶ふ

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>